

NCS HOKKAIDO

Nature Conservation
Society of Hokkaido

2011年2月NO.148

..... CONTENTS

11/1の北海道知事との現地での意見交換会佐々木克之.....	2	石狩浜の現地視察報告.....落合 克尚.....	6
第4回3ダム事業検討会報告.....	3	2010年度「自然を語る会」第4～7回報告.....	8
北海道高山植物保護ネット 第1回市民フォーラム報告.....	4	サポーターズクラブ参加のお願い.....	12
シンポジウム開催のご案内.....	5	お知らせコーナー.....	12
		活動日誌・要望書・新会員紹介・ 寄贈図書・寄付・会費納入お願い等	



(左：クマゲラ、右：ヤマゲラ)

観光優先で藻岩山のこの生息環境は守ることができるのでしょうか？

(撮影 荻田 雄輔)

社団法人 北海道自然保護協会

11/1の北海道知事との現地での意見交換会

副会長 佐々木克之

私たち北海道脱ダムの会は、昨年の4月26日に北海道との第一回意見交換会を開催し、サンル・平取・当別ダムに対する私たちの考えを述べた。意見交換会を継続することで合意して、第二回を8月に行う予定であったが、7月に忠別川上流での災害問題で延期となり、11月1日に、道からの申し入れによって第二回意見交換会は二風谷ダムサイトで行うこととなり、高橋はるみ知事が私たちと会うこととなった。札幌からは協会と当別ダム関係者が参加して、平取ダム関係は地元からの参加者が多く、全体で約35名が参加した。テレビはNHK、道新、毎日、読売、苫小牧や日高の新聞社などマスコミも多く参加した。

予定時間の13:45に知事が着席し、冒頭に、知事がダムを必要と考えている根拠およびダム建設に対する私たちの検証内容についての見解を求める要望書を佐々木から知事に手交した。その後、佐々木から、「今後ダム問題の検証についてお互いが認識を深めていくことに期待する」と挨拶して、要望書内容について佐々木、松井さん（平取ダム建設問題協議会）、安藤さん（当別ダム周辺の環境を考える市民連絡会）から説明を行った。



知事は、9月27日の有識者会議の中間とりまとめに基づく検証の要請が国交省からあったこと、それに基づき関係自治体の検討の場を設置し、パブリックコメントも行い、多くの意見を聞きながら、国に意見を出していきたい。道が主体の補助ダムである厚幌ダムを対象として検証を行っていく、当別ダムについての要望があったが、本体着工を行っている。今までも節目には見直しをやってきたが、これからも節目には見直しを行っていききたい、と述べた。その夜のNHKは、「予定地の自治体などと検討の場を設け、国にも地域の意見を適切に述べていく」「皆さまの熱意と思いを再認識できて、有意義であった。公開の場で意見を聞き、集約していきたい」との知事の発言を放映した。

感想：中間とりまとめの方向でダムの検証を進めていくと発言したのは、自治体の長としてやむをえないとは思ったが、主体性を感じることができず、がっかりであった。ただ、私たちとの意見交換会を続けていくことと、当別ダムはすでに堤体がほぼ完成していても、今後も節目では見直しをしていくと発言したことは評価できる。しかし、その後12月20日に平取で、12月24日に名寄で、北海道開発局が主体となってダム検証のための検討の場が開催されたときに、各自治体首長は、ダムを早期に作ってほしいと異口同音に述べて、検討の場ではなく陳情の場となり、道もはっきりした発言をせず、検討の場の今後は予想通り前途多難である。引き続き、私たちの意見が反映される検討の場となるよう、粘り強く運動を進めていきたい。

第4回3ダム検証検討会

サンル・平取・当別ダムの環境問題

2010年11月28日 13:10~16:30 札幌市民ホール第1会議室

4回目となった今回は環境問題をテーマに3つのダムにおける問題点を検討してみた。

はじめに佐々木北海道自然保護協会副会長から今回の検討会の趣旨の説明が行われ、3つのダムについてそれぞれ環境という視点からの問題点の報告が行われた。

最初は「サンル川の生態系とサンルダム」ということで宮田修（下川自然を考える会）が話された。北海道には大型ダム200基以上、砂防ダム1,100基以上、治山ダム35,000基以上があり、その他取水堰や河川の直線化、護岸などにより河川環境が大きく変えられている。その様な中で天塩川・名寄川の支流であるサンル川は最後に残された自然度の高い川であることによりヤマメが多く、サクラマスが遡上し産卵できる川の一つになっている。経済価値の高いサクラマスは1970年以降減少の一途をたどっており、北海道としても放流等により資源の回復を目論んでいるが一向に改善されない。ここに多額の税金をかけて自然環境を破壊するようなダムを作った場合、更なるサクラマスの資源減少は目に見えている。ダム建設の前にこれまでのダムによる影響をしっかりと検証することが求められていると話を纏められた。

二つ目に「当別川の環境」ということで安藤加代子さんが当別ダムの現状とこれまでの経緯について話され、次に当別川の支流、二番川の所で生まれ育ったという大田さんが話された。幼い頃は当別川もきれいでマスやウグイが沢山いて捕って食べたこと。ただ、1964年上流に青山ダムができてからダムが季節ごとに放水することで大きな石が大きな音をたてて流れていったこともあり、年々川は濁り、荒れて昔の面影は全くなくなってしまった。次に、15年前に青山郵便局で勤務された菊池さんが話され、当別川はヤツメウナギも沢山獲れ、鮭も獲れた。しかし、川の直線化が進む事により魚が生息できない環境になっていった。

三つ目として佐々木さんから沙流川の水質についての報告があり、二風谷ダムが出来た後、濁りとリンが増えてきたこと。またPHが上がり、美味しい米を作ることが出来なくなってきている。

ここで、水道料金の話があり、

- ・全国で水道料金が最も高いのは栗山町
- ・政令都市の中で水道料金が最も高いのは札幌市

当別ダムが出来るとこのダムから取水することになっている石狩市の水道料金は現在でも札幌市の2倍も高いのにさらに高くなり、美味しくないと飲まなくてはならなくなる。また、札幌市の当別ダムからの取水は、2025年から予定されているがダムが完成したら取水しなくても費用負担が生じてくること。しかも、現在の札幌市の水道水供給には25%も余裕があり、今後の人口減少が予測される中で2025年からの取水は本当に必要なのかにも疑問がある。

次に、北大名誉教授であり、天塩川流域委員会も務められた前川光司先生が「河川生態系とは？」のテーマで話された。はじめに河川の中に倒木があり、サケの死骸が多数漂っている川の写真を示され、多様な生態系が保たれていたのが原始的な河川の状態であること。また川は単に川だけで成り立っている訳ではなく、森などと生物を介して相互に依存していること。次に「サクラマス保全の意味」について述べられ、

- ・北海道はサクラマス種群（サクラマス・アマゴ・ピワマス・サラマオマス）の分布の中心にあること

- ・カワシンジュガイなど他の生物との関係がたいへん深いこと。
- ・環境のバロメータであること（河川型であるヤマメと降海回遊型のサクラマス両方が存在しないと繁殖のうでで成り立っていかない魚である）。

が紹介され、“サクラマスの現状”は、1970年頃を境に減少の一途をたどっていて、特に日本海側で減少傾向が著しい。これは天塩川、石狩川の減少によるところが大きく、この原因としては、河川改変や森林の伐採、特にダムによる影響が大きいと考えられる。稚魚の放流による効果も見られるが限定的であること。

結論として、

1. 河川法（洪水・水利・環境）に従って、環境に重大な影響を与えると考えられる時には手法の変更が（ダムありきではない）を考えなければならない。
2. サンプルダムによってサクラマスは重大な影響を被る。治水手法の再検討が必要。
3. ダム建設前にそのダム固有の予測を建てた実験検証が必要。

この後、全体討議をおこない、前川先生の述べられた論点を盛り込んで提言を纏めることとなった。

（記 荻田）

北海道高山植物保護ネット

第1回市民フォーラム報告

2010年11月27日 13:00~17:30 於北大地球環境科学研究院大講堂

1998年に発足した「北海道高山植物盗掘防止ネットワーク」が、高山帯が抱えるさまざまな問題に取り組むため今年「北海道高山植物保護ネット」と改称した。今回「第1回市民フォーラム」が開催され、参加したので報告する。なお、代表が小野有五北大教授から大原雅北大教授に替わられた。

主催者挨拶の後、講演として礼文島の写真家として知られている柚田美野里（そまだみのり）さんが「礼文・高山植物と共に生きる」の題で礼文島の四季をご自分で撮られた写真を交えながら話された。今年の礼文島の天候も、北海道全体の天候同様に春先の低温と、夏の暑さで特徴的な年となった。そのせいか草原の草丈は高くなり、この様な夏が続いたら高山植物たちはどうなるのだろうかと多くの鳥民は心配されたとのこと。やはり、礼文島は昆布やウニなどの海産物と観光で成り立っている島です。観光の目玉ともいえる高山植物の生育地は人々の暮らしている平地と変わらない高さであり、多くの観光客が訪れる。でも6月のエゾノハクサンイチゲやレブンキンバイソウ、8月のリシリプシの群落は今まで見たことのない美しさだったとのこと。高山植物は子孫を残すための活動を天候の変動に応じて懸命に行っている。柚田さんは環境NPO礼文島自然情報センターの一員としても、盗掘防止パトロールや自然歩道の保全、外来種の除去、環境教育等多くの人々と取り組んでいる。が、活動を進めるには島に住む人の自然への共通理解が不可欠であり、そのためにはそれぞれの暮らしへの敬意を忘れず、参加しやすい活動を工夫することが大切であり、それを次の世代に繋げていける「楽しさ」のある活動を続けて行きたいとの話で締めくくられた。

つぎに、道総研環境科学センターの宇野裕之さんが「エゾシカの今と昔～生態と保全・管理」の題でここ数年爆発的に増加しているエゾシカの状況と特に国立公園での植生や高山植物への影響について話された。エゾシカの分布は従来道北・道東に多かったが、ここ数年絶対数の増加と共にえりも地区や道央地区にも多くなった。

増加の要因としては、・生息環境の改変（牧草地、伐採跡地の増加）・温暖化（大雪の減少、死亡率の低下）
・捕獲圧の低下などがあげられた。最後にまとめとして

- 1) 高山帯への影響把握 ○実態把握（植生調査）○越冬地・シカの移動の把握
- 2) 森林管理（シカ管理）○生息地管理・個体群管理・被害管理 ○フォレスターなどの専門家
- 3) 自然資源の持続的利用 ○食べて「生物多様性の保全」

の話がされた。

この後、若手研究者による研究事例紹介ということで北大・環境科学院の二人が発表を行った。

「雪解け時期の変動に対する高山植物の生活史戦略」川合由加さんは、大雪山系の雪田の雪解け時期の違いが高山植物に与える影響についてミヤマリンドウを用いて研究された結果を報告された。

「性転換する植物・マムシグサの繁殖戦略」大松ちひろさんは、マムシグサが実生から無性個体となり、花を付けるようになると有性個体となり一個体に複数の花からなる花序を一つつけるが、その花序は雄花もしくは雌花のどちらか一方のみで構成すること。そのため集団中には雄個体と雌個体が存在し、さらにその性別を年単位で個体サイズに依存して変化させること。この様な“性転換”を行う植物は草本の中ではマムシグサのみとのことで、植物の多様な性表現を考える上で興味深い植物であるとの話があった。マムシグサも繁殖は虫などに頼っているが、雄花に潜り込んだ虫は雄花の下の方に空いた孔から脱出して、雌花に飛んでいく事ができるようになっている。ただ、雌花にはこの様な孔は空いていないということで近郊の林などで時々見かけるマムシグサに関わる興味の深い話であった。

この後、梅沢俊（植物写真家）さんから「2010年に出会った花、気になった花」のタイトルでスライドを映しながら話があり、さらに各地域からの報告が行われた。 (記 荻田)

シンポジウム「風力開発が貴重な自然環境に与える影響」開催のご案内 — 石狩・銭函海岸の風力発電計画を考える —

日 時 : 2011年3月21日(月・祝) 13:00~17:00

場 所 : 北大学術交流会館小講堂(札幌市北区北8条西5丁目 北大正門を入り左側)

主 催 : (社)北海道自然保護協会

共 催 : NACS-J(財)日本自然保護協会

内 容

- ① 基調講演「風力発電の理想と現実」 武田 恵世(たけだ けいせ)氏
三重県伊賀市「青山高原の自然を守る会」代表
- ② 小講演(4人予定)と武田氏によるパネルディスカッション

内容の問合せ・参加など : 北海道自然保護協会 TEL 011-251-5465 FAX 011-211-8465

Eメール nchokkai@polka.ocn.ne.jp

※詳しくは同封の案内をご覧ください!!

石狩海岸現地視察

理事 落合 克尚

2010年10月10日、北海道自然保護協会では問題となっている、石狩海岸の風力発電施設建の予定地を視察した。今では貴重になった人工物の少ない美しい海岸線が遠くまで延びている。暑寒別連山は、はるかかなたにゆらゆら揺れているように浮き上がっている。砂浜は、静かに波が打ち寄せており、おだやかな雰囲気である。

生憎の小雨の中、新川河口付近に会長以下協会員及び賛同する方々12名が集まった。雨カッパ等を着込み海岸までのガタガタ道を車に分乗し出発。新川河口から樽川埠頭までの約4km。波打ち際に車で移動しながら、途中風車が建つと思われる場所を確認していく。砂丘の上から望む風景は、一見砂に埋もれて何もないように見えるが、貴重な植物や昆虫、鳥類の生命の営みがしっかり受け継がれている。人間にとって不毛な土地に見えても、実は、そこには生物が生き抜く知恵と工夫が隠されている。山菜として採取が問題となっているハマボウフウ、レッドリストに掲載されたエゾノミズタデ、エゾアカヤマアリの巨大コロニー、絶滅危惧種に指定されたイソコウモリグモやキノコのアカダマスツボンダケなどが数えきれないほど生育、生息し、豊かな自然環境になっている。また、野鳥も約100種近くが、砂浜、草原、海上に飛来して、子を育て次の世代につなげている。海岸特有の種をはじめとして、多種多様な動植物が生育する優れた海岸である。

波打ち際、砂原、草地、カシワ林と植相がまるで造ったように層別に発達している。全く人工物のない自然のなす力と美しさをひしひしと感じる。人が創りえない規則性を持ったおだやかな風景が、心を安らかにする。松浦武四郎が辿ったかもしれないカシワ林は、海岸線に平行に約4kmほど延びている、途中港などで分断されてはいるものの、石狩河口まで帯状に延々と続く様は石狩だけだという。全国的に見ても、ほぼ原始のままに残っているカシワ天然林はここだけである。

夏には、立錫の余地がないほどテントやタープが並び、家族連れやカップル、会社の仲間がそれぞれ充実した時間を過ごしている。定番の焼肉をするグループ、ビーチボールでたわむれる親子、沖あいではレジャーボートが波しぶきを上げるなど、数千人の人々が、夏の日差しをいっぱい浴び過している（写真1）。

心を休め、いやしの時間をたっぷり味わえる場所は、まもなく一企業と行政によって奪われようとしている。皆が遊んでいる背後20~30m付近に、高さ100m以上の風車が15基設置され、風のある時はグルグル回ることになる。海水浴をしたり、バーベキューを自然の中で楽しむという環境は全く失われてしまい、落ち着いてゆったり過し、気分転換をはかることは、全く期待できなくなる。そんなことを思いながら、小高い丘に立った（写真2）。

おろかしい人間の行為を悲しむように、小雨がヤッケの肩を濡らす。草地に入る都度、植生や野鳥の種類、海岸のなりたちなどを聞きながら進む。しかし、砂丘草原は、レジャー車両のワダチで見るとも無残な状態になっている。縦横無尽に走り回るために深くえぐられ、草木の根が浜風にさらされている。小木が今にも朽ち果てるよ



写真1 波打ち際に並んだ車



写真2 小高い砂丘からの観望

うに、数本の根でかろうじて大地とつながっている姿は、やりきれなさでいっぱいだ。レジャーに名をかりた個人の勝手な行為で、破壊されることもさることながら、今度は、企業・行政の名によってこれ以上のダメージを与えられようとしている。

高さ100mを超える巨大風車。強い浜風を受けるため、埋め込み、掘り起こされる範囲は想像以上ようだ。脆弱な砂地に建てるのだから、当然穴の大きさも、深さもはるかに大規模で、基礎となるコンクリートも推定2000トン前後になるようだ。また、新幹線車両並みの大きさのタワーを運ぶための大型トレーラーが入れるような、広い道路を砂丘につくることになる。カシワ林も分断されることも考えられる。設置後のメンテナンスのために道路は残る。草地は分断されたまま。ここで子育てをするノビタキやホオアカなどは、狭められた生活環境をなげいてさえずるに違いない。長い時間にわたって営々と受け継がれてきた野鳥、昆虫、植物たちの営みを断ち切る権利を、人は持っていないと思う。彼らと同じ場所で住まわせてもらっているのであり、人の横暴や思い上がりは通用しないし、受け入れられないと思う。また、廃棄物はいたるところに散乱している。ジンギスカンナベやコンロなどワンセットそのまま放置されている場所もある(写真3)。

モラル以前に石狩海岸に来る資格のない人がかなり多い。草地にも不燃物などが顔を出し、みにくい風景になっている。自分勝手な大人達の姿は、子供達にしっかり伝わってしまうと思うと、何ともやりきれない思いがわいてくる。

終点の樽川埠頭前では、キノコをじっくり観察した。キノコは森林に生育するという固定観念が強いが、このような砂地で塩分が多く、風も強い場所に生きているというのは大きな驚きである。ハマニンニクの枯れた根元に発生したスナジホウライタケ、砂地からこん棒状に伸びたガマノホタテダケ。一本見つけると、そこそこに無数に顔を出している(写真4)。

このような豊かな海岸砂丘の環境を守ることは、緊急の課題だと思う。新川河口に戻って、それぞれ休憩と昼食をとった。波は穏やかに打ち寄せ、小樽・積丹方面はかすみがかかったように眺められる。何の変化もなくおだやかそうに見えるが、この景観はもうすぐ巨大な人工物で一変してしまうと思うと、何とも悲しい。余市方面から眺めても、きれいな曲線をえがいた海岸線に、似つかわしくない建造物が建ち並ぶことは想像しても異質な光景だ。後世にありのままの姿で残したいと思うのは、小生だけではないと思う。

その後、石狩工業団地内にある風車を実査した。国道からわずかに入った草地にでんと1基。柵も何もなく無造作に建っている。風がないため、ローターは回っていない。しかし、真下に近づくときさすがに大きく圧倒される。ローターが回っている時の、低周波音や騒音を想像してみたが、今は極めて静かである。風力発電に賛意を示した方々の個人名が、数百人分銘記されており、こんなに沢山の方がサポートしているという証なのか、企業の抜け目ない意思表示と解釈した。

小雨の中の現地視察だったが、小生にとって大変意義深く、そして風発問題に取り組む思いを更に深くした。参加された皆様、ありがとうございます。



写真3 ゴミが散乱



写真4 ガマノホタテダケ

2010年度「自然を語る会」開催報告

今回は2010年度の2回目の報告として10月の第4回から1月の第7回までの報告をいたします。

〔自然を語る会〕

会 場：北海道大学学術交流会館・会議室（札幌市北区北8条西5丁目）

第4回、10月5日（火） 18：00～20：00

「鳥類にとって銭函海岸林はどんな場所なのか？」

話題提供者 竹中万紀子さん（東海大学生物理工学部非常勤講師）

風車建設予定地の銭函海岸について、鳥類の研究者である竹中さんは要旨の中で小樽市銭函から石狩湾新港にかけてのカシワが主要な構成樹種となっている海岸林は、その海側が海浜性の草原、陸側に高茎草原や耕作地などが広がっている。このため長距離にわたってベルト状に森林と多様なエコトーンが続くユニークなハビタットが形成されている。石狩地方の地図を見ると明らかのように、この海岸林は、ほぼ南北に長く伸びる自然環境である。道西ではワシ類などを含む渡り鳥の移動ルートとして重要な役割を果たすと考えられる。鳥類の繁殖地として重要である事も言うまでもないと述べている。

風車建設計画の問題点として自然環境、健康被害、景観問題があげられるが、市民側はデータ不足である。そこで、

- ① 建設される場所の問題点の洗い出し（インターネットからや文献の収集など）。
- ② 市民調査の実施の検討。
- ③ 広く問題を市民に知らせる為にフォーラム、シンポジウムの開催（国内外で積極的に取り組んでいる人をゲストスピーカーとして招く）。
- ④ その資金をどうするか？募金活動をしてはどうか。調査などは1人の研究者の負担にならないように鳥ならいつも現地を観察している複数の人に交代で2度か3度観察してもらいデータを集積していくやり方かどうか。

予定地を2008.11月～2009.3月まで調査したが、周辺をワシ類が頻繁に移動していた。生息が確認された野鳥はワシタカ5種、キツキ類3種、ハト類2種、小鳥類35種、カモ類3種、サギ類1種以上、カモメ類3種以上などが観察された。

ネットで調べると伊賀市阿保で風車建設後の鳥類に与える影響を詳細に調べている方や、アメリカの野生生物保護官が風車は野生生物に多くの影響が出ている、特にコウモリの被害などが多いことなど問題が多数載っている。風車についてもよく検討する時期に来ている。

最後に生物調査を市民で行うようにしなければならぬ時であるとの竹中さんの提言で、語る会の参加者と竹中さんと共に10月10日に風車建設地の視察、調査に行く事が決められた。（記 福地）

第5回、11月16日（火） 18：00～20：00

「自然保護における市民参加と協働」

話題提供者 八巻 一成さん（森林総合研究所北海道支所主任研究員）

今回の話題提供者、八巻一成さんは筑波大学では都市計画を勉強されていたそうですが、人工的につくる街に疑問を持ったとき自然と出会い、自然に関わるようになったとの事です。森林総合研究所では北海道に赴任して20年余、森林政策・自然資源管理を研究されています。今回は上記テーマで3つの事例を取上げお話ししていただ

きました。

一つ目は「野幌の森の再生」ということで、まず明治の開拓以来の野幌の森の変遷を話されました。明治21年に新潟からの北越殖民者による開拓がはじまり、明治41年には林業試験場の試験林となり、大正10年には森林の一部322haが野幌原始林の名で天然記念物に指定された。この様な歴史の中、地域住民の森として農業用水の水源林、また山菜・薪などの採集などに活用されてきた。それが周辺の都市化およびエネルギー革命により地域住民との関わりが希薄となり、都市住民のレクリエーションの森として変化してきた。現代の野幌の森の課題としては、戦後50～60年を経て野幌の森の使用目的が変わるとともに住民・市民の利用も変化してきている。しかし、ルールもないのが現状であり、今後のことを考えると何らかのルール化が必要と思われる。2004年の台風被害以降、それまでの住民・市民の意見を聞いて行政が動くというスタイルから住民・市民が自ら関わり行政と市民の協働による自然保護の段階へ進んできている。

次に「レブンアツモリソウ」の保全活動について話された。レブンアツモリソウは礼文島にだけ生息する絶滅危惧種であり、島にとっては重要な観光資源ともなっている。もともとレブンアツモリソウは島の各地で見ることができたものが、1980年初期に高値で売れるということもあり大量に盗掘被害が出たことにて、1983年礼文町が「礼文町高山植物保護対策協議会」を設置、1984年には群生地を町天然記念物に指定した。しかし盗掘は続き、絶滅を危惧した礼文町は「高山植物培養センター」を設置し、無菌培養の研究に着手した。1993年には林野庁が保全事業を開始、1994年には北海道天然記念物に指定された。レブンアツモリソウは脆弱な土地（砂地）の上に生息しており、地元の貴重な観光資源として礼文町だけで保護に乗り出した後に、国が関わってきたことにより、関係団体が急に増えたこともあり非常に調整が難しくなってきたこと。また現状は必ずしもベストな状況にない。これからどの様な形態で進めることが良いのか考えていく必要がある。

保護活動に関わっている人たちへのアンケートでは、保全対策の向上には、良好な協力体制づくりが重要との話で締めくくられた。

三つ目として「農山村の管理放棄による問題」ということで、今日耕作放棄地や消滅集落跡地の半分が管理されていない状況にあり、それらの中で最も際立っているのが草地・湿地であること。その様な中で岩手県の安家森のケースを取上げ、話をされた。「安家森」は短角牛を放牧された放牧地であったのが放牧を止めたことにより放牧地が林地化してきた。これをもとの草原を復元する取り組みとして林間サポーター制度を設け、サポーターには年会費を出してもらいその資金で短角牛の放牧を行い、会員には短角牛肉をプレゼントするというもので、生業と保全をリンクした活動である。

最後に自然保護における協働としては、

- ・口だけでなく、多様な形態（ボランティア、資金）による市民の支援
 - ・政府による一元的管理（ガバメント）から、市民との協働による管理（ガバナンス）への変化がある、との話
- して終了した。その後、活発な質疑応答がなされた。 (記 荻田)

第6回。12月14日（火） 18：00～20：00

「知っているようで知らないカラスの話」

話題提供者 中村眞樹子さん（札幌カラス研究会代表）

札幌に年中生息しているのは、ハシブトガラス（以下ブト）とハシボソガラス（以下ボソ）の二種類である。カラスイコール黒くて不気味な鳥というイメージであるが、全く違う生き物である。特徴は次の通り。

- ボソ：・おでこが出っ張っていない
- ・しわがれ声で鳴く

・地面をテクテク歩きながら、ご飯をさがす

・人を直接攻撃することは少ない

ブト：・クチバシが大きく湾曲している

・おでこが出っ張っている

・カァカァと澄んだ声で鳴く

・神経質な正確で、人への攻撃性も高い

3～4月は求愛・抱卵時期あり、育すう期の7月頃までが一番人とのかかわり・問題の多い期間である。カラスは、ゴミばかり食べているように思われているが、実際は木の実や虫などあらゆる自然の恵みを食べている。ほおの木の実、ブトが大好物である。ビショビショになった食べ残しは、シジュウカラなどの小鳥が食べている。道庁にあるオンコの実も大好物で、一本の木に群がって食べているところが見られる。また、タンポポの花も大好きで、普段憎たらしいと思っても、カラスが黄色い花を食べている姿は大変かわいらしい。

カラスは、1年間つがい生活している。ご飯を食べる時も、水浴びする時も、寝る時も一緒。たまに、バラバラになる時もあるが、必ず待ち合わせ場所で待っている。身だしなみは、カラスの行水といわれるが、時間をかけて何回も水を浴び、清潔に保っている。アリの巣の上に乗って、体にアリをつけていることもある。アリの蟻酸を体につけて、虫除けにしているのではないかとされている。

繁殖は、3月ころから巣作りに入る。小枝やハンガーを利用して、オス、メス共同で作る。卵を温める大事なところは、犬の毛などの柔らかいものを使って保温を高めている。この時期一番問題になるのは、人間を襲うということである。理由は簡単で、カラスは神経質で自分の巣や雛のところに人間が近づくからである。ただそばを歩いただけでも、カラスにしてみれば、自分の縄張りの中に無許可で入ってきた侵入者なので、警戒するということである。人が嫌いではないが、近寄らないでと騒いでいるだけである。役所に、カラスに襲われたと苦情を申し出るのは、ほとんどがカァカァ鳴かれた、後をつけられたということが多い。

ボソはほとんど攻撃しない。巣立ちの一週間前後に多少鳴いたりする程度である。ブトは、孵化した雛がいる頃になると、人が通っただけでいやな声を出したり、後をつけられたりする。育すう後期になると（巣の中から子カラスの頭がほこほこ見える）大変神経質になって、威嚇のため低空飛行したりする。ブトもボソも巣立ち後二週間くらいで飛べるようになるので、親の威嚇もなくなる。

攻撃を回避する方法は、カラスがさわいでいると思ったら、近づかないことである。石や小枝など投げないで、見てみぬふりをすることである。腕をまっすぐ上げて動かさず、ゆっくり歩くといい。黒いものは嫌がる。黒いカサを半開きにして歩いていると、カラスの死体に見えて、襲われたという経験がある。ゴミステーションで襲われたという人がある。カラスはゴミに向かって低空飛行しただけであり、人の勘違いが多い。

ねぐらは、秋から冬にかけて集団で一箇所に集まって寝ることが多い。15時頃、集まって同じ方向のねぐらに行く。葉っぱのない枝に群れて寝ている。ねぐら入りする前は、道庁やJRタワー付近に集まる。北大も4～5年前から利用されている。

カラスは、遊びが好きである。くるみ割りも遊び（練習）を失敗しながら覚えていくようだ。要領を覚えてからは、道路に落として車に割ってもらって食べている。ゴルフボールを見つけて遊んだり、気に入って隠してルンルン気分で行ってしまう。それを見ていた他のカラスが見つけて持っていくということもある。マヨネーズも大好きで、足で押さえて食べている。

ブトは集団で遊ぶが、ボソは単独で遊ぶことが多い。公園の水を出して飲むということもするが水は止めない。

以上、限られた時間だったので、どれだけカラスのことを理解してもらったかわからないが、とりあえず、カラスも野鳥なので、特別な色眼鏡で見るのではなく、普通の鳥として扱ってほしい。

また、誤解された部分が多いので、逆に被害者なのかも知れないと思ってほしい。

カラスを見る機会があると思うが、正しく理解し見てもらいたい。

(記 落合)

第7回. 2011年1月18日(火) 18:00~20:00

「イネ:多様性と適応のしくみ」

話題提供者 佐野 芳雄さん(北海道大学農学部名誉教授)

日本人の主食である米、その米を実らせるのは「イネ」である。日本で美味しいと好まれている「コシヒカリ」や一昨年から北海道で本格的に栽培が始められた「ユメビリカ」は新聞紙上でも取上げられ、いまや北海道は日本の最大の米生産地である。が、私達はどれ程このイネの事を知っているであろうか?という事で今回はイネの遺伝子等について長年、国立遺伝学研究所、北海道大学で研究を続けられ、昨年北大を退官された佐野芳雄氏にお願いしました。話はイネの歴史からはじまりました。

農耕が始まったのは約1万年前、人類が出現したのが15~10万年前ということ考えると極めて最近のことと言うことができる。栽培イネには2種があり、アフリカのグラベリマとアジアのサティバである。グラベリマがアフリカの極めて限られた所で栽培されているのに対してアジアのサティバはインド大陸~中国南部・インドシナ半島~インドネシア~オーストラリア大陸北部に分布していた野生イネが今は中国華北・日本でも栽培されるようになり、小麦・トウモロコシと並ぶ一大穀物となった。

アジアの栽培イネにはインディカ種とジャポニカ種があり、ジャポニカ種には熱帯ジャポニカ種と温帯ジャポニカ種がある。日本で現在栽培されているのは温帯ジャポニカ種である。アジア野生イネには、草丈の低い1年生と草丈の高い多年生(水の多いところに育っている)があり、栽培イネの多くは生物学的にみると多年生である。栽培種は野生種のほんの一部を使っているので環境変動に弱いという面がある。現代のように環境が大きく変動していると多くの野生種が絶滅している。野生種が絶滅するという事は、やがては栽培種の絶滅にも繋がるという危険性がある。

20世紀初頭、近代的農業技術の開発・普及により食料増産に成果を挙げた。灌漑整備・機械化・農薬散布に加え多量の化学肥料を利用することで収量の向上がなされ、いわゆる「緑の革命」といわれる増産が成し遂げられた。それまで穀物の輸入国であったメキシコでは、「緑の革命」により輸出国となったが、急激な人口増加によりほどなく穀物の輸入国に逆戻りしたのである。地球上では今でも食料増産と人口増加の競争が続いているのである。

野生種のイネは100%赤米である。ジャポニカ種にもインディカ種にも赤米と白米があり、これまでは、それぞれが突然変異で白米が生じてきたものと考えられてきた。しかし、最近のDNA分析によると白米のジャポニカ種もインディカ種ともにDNA配列が同じであることが判明した。このことは、すべての白米系統はジャポニカ種の赤米遺伝子から突然変異により生じたものと考えられる。今まで予想できなかったことが判明したのである。

現在の品種改良は、より収量が高く、より人に好まれ、より広く栽培できる品種育成が目標とされ、経済効率の高い品種の拡大により、人類の生存は小麦、イネ、トウモロコシの限られた穀物に大きく依存するようになり、それらの穀物のより優れた品種を広く栽培することによって世界中の作物や在来品種をさらに減らしている。日本で栽培されているイネの80%はコシヒカリ系統となっており、モノカルチャーの大きなリスクを抱えている。

因みに、世界で一番美味しいと言われている米は、パキスタンでバスマティという品種であるということで話は締めくくられた。その後、活発な質疑応答がなされた。(記 荻田)

北海道自然保護協会サポーターズクラブ参加のお願い

協会では人手不足のため、会報の発送やイベントの設営・受付などのお手伝いをいただける方のボランティアでの参加を募集いたします。

誰にでもできる簡単な作業をお願いしたいので気楽にご参加下さい。

応募方法は、協会にサポーターズクラブ参加と明記しeメールをお送りいただき、事務局がそれを登録させていただきます。お願いしたいことが発生した時、その都度、協会から一斉に登録してあるメールアドレスに日時・内容をお知らせいたします。

急な依頼になるかもしれませんが、都合の良い方のみお手伝いをしてください。

気軽に参加できるクラブにしたいと思えます。是非多くの方々の登録ご協力をお願いします。

(社)北海道自然保護協会 事務局
協会eメールアドレス info@nc-hokkaido.or.jp

活動日誌

2010年10月
2～3日 第17回水資源総合会&北海道の三ダム事業を検証する全国集会(北広島市、札幌市)
5日 第4回自然を語る会「鳥類にとって石狩海岸林・海岸草原における発電風車計画について」講師 竹中万紀子氏
9日 サンプルダム関係対策会議(旭川宮田宅)
10日 銭函風力発電計画予定地現地視察
18日 平取ダム関係打合せ
19日 平成23年度鳥獣被害緊急対策説明会
22日 第4回拡大常務理事会
25日 会報147号発送
27日 北海道札幌建設管理部(旧札幌土現事業所)厚別川、琴似川等の河川敷の樹木伐採計画について打合せ来所

2010年11月
1日 北海道サンル・二風谷・平取・当別各ダムに関して北海道知事との意見交換会(二風谷ダム管理事務所)
8日 当別ダム再評価専門委員会傍聴
12日 第4回3ダム事業検討会打合せ
16日 第5回自然を語る会「自然保護における市民参加と協働」講師 八巻一成氏
22日 11/1「サンプルダム・二風谷ダム・平取ダムおよび当別ダムに関する要望書」に対する北海道の回答書(11/18)を受けて追放記者クラブへ意見表明
24日 銭函風力開発事業に対する北海道への要請活動および記者会見
25日 第5回拡大常務理事会
27日 北海道高山植物保護ネット第1回市民フォーラム「お花畑はいま…」
28日 第4回3ダム事業検討会 テーマ:環境問題
第10回沼田眞賞に佐々木副会長受賞決定

2010年12月
3日 北見道路裁判第6回口頭弁論(札幌地裁)
6日 北海道総務部行政改革課法人団体課公益法人グループとの話し合い
8日 北海道札幌建設管理部厚別川、琴似川等の河川敷の樹木伐採計画について打合せ来所
13日 銭函風力開発事業、北海道建設土木局砂防防災課との話し合い
14日 第6回自然を語る会「知っているようで知らないカラスの話」講師 中村眞樹子氏
18日 第3回理事会
20日 沙流川総合開発事業平取ダム第1回検討会傍聴(平取町)
24日 サンプルダム第1回検討会傍聴(名寄市)
25日 公益法人見直しに関する担当者会議

2011年1月
18日 自然を語る会「イネ:多様性と適応のしくみ」講師 佐野芳雄氏
20日 第6回拡大常務理事会
22日 銭函風力開発事業、北海道環境生活部環境局との話し合い
28日 第10回沼田眞賞受賞式及び記念講演、佐々木副会長(東京)

要望書など

- 10月4日 北海道開発局長、北海道知事宛【北海道の三ダムに関する要望書】及び全国集会決議文を水資源連代表等で提出
- 10月23日 環境大臣宛、林野庁長官宛、北海道知事宛【北海道における新しい国立公園の指定、とくに「日高山脈・夕張山地」を国立公園として早期に指定することの要望書】
- 10月23日 銭函風力開発、日本風力開発協会【銭函風力開発事業に係る環境影響評価(案)に対する意見】、高橋北海道知事宛【銭函風力開発事業に関する質問・意見書】
- 11月25日 北海道知事宛【サンプルダム・二風谷ダム・平取ダムおよび当別ダムに関する再要望書】北海道脱ダムをめざす会

- 11月26日 北海道知事宛【銭函風力開発事業に関する質問・意見書(追加)】
- 12月16日 北海道知事、開発局長宛【平取ダムおよびサンプルダムの検証に係る検討についての要望書】北海道自然保護連合他16団体連名
- 12月24日 馬淵国交大臣、今後の治水対策のあり方に関する有識者会議宛【北海道における3ダム事業(サンプルダム・平取ダム・当別ダム)の必要性の検証結果と提言その4-環境問題-】北海道脱ダムをめざす会
- 12月27日 馬淵国交大臣、道開発局長、他計5箇所宛【平取ダムとサンプルダムの検討の場の運営に関する要請】北海道脱ダムをめざす会

新入会員紹介

2010年8月～2010年11月
【A会員】 川村 史子、熊谷 啓一

寄贈図書紹介

- ・小島望会員より
「生物多様性と現代社会」(旭山山通村文化協会)
- ・北海道大学出版会より
「カラスの自然史」橋口広芳・黒沢令子編著
- ・佐藤謙会長より
「林分施業法」<改訂版>高橋延清著
- ・斜里町知床博物館 中川元会員より
しれとこライブラリー10「知床の自然保護」斜里町・斜里町教育委員会
- 「データブック知床・2010」斜里町立知床博物館

寄付金

ありがとうございます
若井 聡さん 2,000円
富士ゼロックス株式会社さん 100,000円
富士ゼロックス株式会社さん 100,000円
五十嵐敏文さん 5,000円

会費納入のお願い

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいませようお願いいたします。

個人A会員 4,000円
個人B会員 2,000円
(A会員と同一世帯の会員)
学生会員 2,000円
団体会員 1口 15,000円

〈納入口座〉
郵便振替口座 02710-7-4055
北洋銀行本店営業部(普通) 0017259
北海道銀行本店(普通) 0101444
〈口座名〉

社団法人 北海道自然保護協会